役職人事

新たに役職者となった辞令受令者は次の通り。
［凡例］●役職名　氏名／所属学部・職名／年齢／専門／任期

平成22年4月1日付け

●副学長

清水　敏寛＝しみず・としひろ／理工学部・教授／64歳／非線形科学、健康医工学総論、医療統計学／平成24・11・30まで

●副学長

角田　直也＝つのだ・なおや／体育学部・教授／57歳／運動生理学／平成24・11・30まで

●大学院政治学研究科長

戸津　正勝＝とづ・まさかつ／政経学部・教授／67歳／アジア地域研究、東南アジア民族文化論／平成24・3・31まで

●大学院経済学研究科長

藤本　公明＝ふじもと・きみあき／政経学部・教授／60歳／民法／平成24・3・31まで

●大学院スポーツ・システム研究科長

青山　利春＝あおやま・としはる／体育学部・教授／66歳／体育学／平成24・3・31まで

平成21年12月1日付け

●学長室長

角田　直也＝つのだ・なおや／体育学部・教授／57歳／運動生理学／平成24・11・30まで

●アジア・日本研究センター長

朝倉　正昭（あさくら・まさあき）体育学部・教授／69歳／体育科教育学／平成22・3・31まで

●キャリア形成支援センター長

河野　英二＝かわの・えいじ／政経学部・教授／57歳／ヨーロッパ語系文学、各国文学、文学論／平成24・11・30まで

●大学院救急システム研究科長

島崎　修次＝しまざき・しゅうじ／体育学部・教授／69歳／救急医学、メディカルコントロール特論／平成24・3・31まで

●大学院工学研究科長

西原　公＝にしはら・ただし／理工学部・教授／62歳／機械材料工学、機能材料学／平成24・3・31まで

●大学院法学研究科長

高橋　敏＝たかはし・さとし／法学部・教授／61歳／民法／平成24・3・31まで

●大学院人文科学研究科長

勝田　政治＝かつた・まさはる／文学部・教授／57歳／近代日本史／平成24・3・31まで

●大学院グローバルアジア研究科長

唐渡　興宣＝からと・おきのり／21世紀アジア学部・教授／66歳／経済原論／平成24・3・31まで

●理工学部長・工学部長

福田　勇＝ふくだ・いさむ／理工学部・教授／61歳／非線形偏微分方程式／平成24・3・31まで

●法学部長

渡辺　中＝わたなべ・ただし／法学部・教授／62歳／公法学／平成24・3・31まで

●文学部長

枝村　亮一＝えだむら・りょういち／文学部・教授／62歳／スポーツ社会学／平成24・3・31まで

●21世紀アジア学部長

梶原　景昭＝かじわら・かげあき／21世紀アジア学部・教授／62歳／文化人類学／平成24・3・31まで

●図書館長

藤田　忠＝ふじた・ただし／文学部・教授／67歳／中国古代史／平成24・3・31まで

●教務部長

吉川　吉衛＝よしかわ・きちえ／法学部・教授／65歳／商法、会社法・企業法／平成24・11・30まで

●学生部副部長

中野　紀明＝なかの・としあき／文学部・教授／64歳／体育科教育学／平成24・11・30まで

●国際交流センター長

前川　和也＝まえかわ・かずや／21世紀アジア学部・教授／68歳／古代メソポタミアの歴史と言語／平成24・3・31まで

●国際交流センター副センター長

生方　淳子＝うぶかた・あつこ／政経学部・教授／52歳／哲学、フランス語、EU研究／平成24・3・31まで

●アジア・日本研究センター長

沢田　正昭＝さわだ・まさあき／21世紀アジア学部・教授／67歳／文化財科学／平成24・3・31まで

●アジア・日本研究センター副センター長

柴田　德文＝しばた・とくふみ／政経学部・教授／63歳／日本国際政治史、国際政治理論／平成24・3・31まで

●生涯学習センター長

小倉　收＝おぐら・おさむ／政経学部・教授／65歳／国際経済論／平成24・3・31まで

●生涯学習センター副センター長

守谷　哲夫＝もりや・てつお／理工学部・教授／58歳／形式言語理論、オートマトン理論／平成24・3・31まで

新規採用教職員

4月1日付新規採用教職員は、次の通り。
【教員】
［凡例］氏名／所属学科職名／年齢／主な担当科目

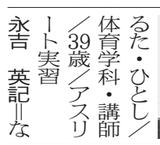
●政経学部

林　倬史＝はやし・たかぶみ／経営学科・教授／65歳／多国籍企業論

●体育学部

黒須　俊夫＝くろす・としお／体育学科・教授／65歳／教育心理学

島崎　修次＝しまざき・しゅうじ／スポーツ医科学科・教授／69歳／国際救急比較研究

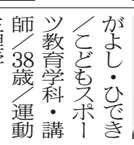


古田　仁志＝ふるた・ひとし／体育学科・講師／39歳／アスリート実習

永吉　英記＝ながよし・ひでき／こどもスポーツ教育学科・講師／38歳／運動生理学

●法学部

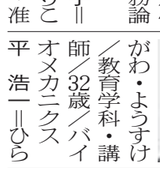
山本　浩美＝やまもと・ひろみ／法律学科・教授／49歳／民事訴訟法



満井　美江＝みついい・よしえ／現代ビジネス法学科・講師／44歳／企業法務論

●文学部

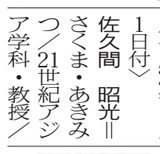
鈴木　江理子＝すずき・えりこ／教育学科・准教授／45歳／社会学



江川　陽介＝えがわ・ようすけ／教育学科・講師／32歳／バイオメカニクス

平　浩一＝ひら・こういち／文学科・講師／35歳／日本近代文学・文化論

●21世紀アジア学部

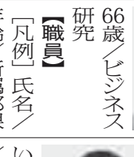


佐久間　昭光＝さくま・あきみつ／21世紀アジア学科・教授／66歳／ビジネス研究

【職員】
［凡例］氏名／年齢／所属部課

相坂　大輔＝あいさか・だいすけ／23歳／総務課

高橋　智＝たかはし・さとる／34歳／大学院課程



飯塚　正樹＝いいづか・まさき／23歳／政経学部事務室

傅　杰＝ふ・じえい／25歳／留学生支援課

渡司　浩二＝わたし・こうじ／31歳／経理課

■理事長　大澤　英雄
■理事　朝倉　正昭
阿部　昭
瀬野　隆
田代　博司
安西　博見
岡林　中今
天羽　敬祐
佐伯　弘治
南　克之
宮脇　磊介
樹下隆之助
石田　唱司
朝倉　正昭
川野　一成
阿部　昭
小牧　輝夫
清水　敏寛
田代　博司
瀬野　隆
中島　徹
西山　一行
安西　博見
小谷　正己
柴田　則夫
平木　邦雄
岡林　中今
加藤　純一
小泉　興七
谷岡　三勇
矢口　次夫
黒羽　亮一
佐伯　弘治
坂本　廣身
清水　司
三田　高裕
柴田　梵天

■監事
■評議員

学校法人国士舘役員・評議員等一覧（4月1日現在）

■舘長

FD　政経学部の取り組みと課題

政経学部教務主任　平石　正美

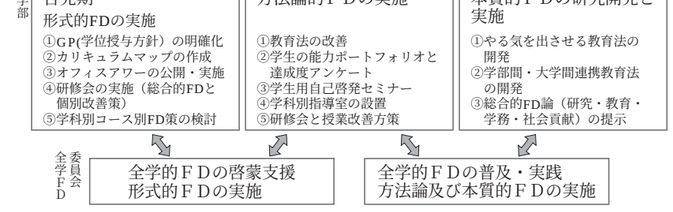
政経学部は、従前から学生の進路指導とカリキュラムの連動、授業評価アンケートの実施と公表、少人数ゼミナールによるきめ細かな教育に努め、学生本位の教育を進めてきた。しかし、教育本来のカリキュラムの充実や授業内容の改善だけでは、学生の理解度や習熟度の向上にはつながらず、FD（Faculty Development：教職員が教育・研究力の向上を図る組織的活動）による見直しが必要とされてきている。

FDでは、教職員一人ひとりの気づきが、組織的な改善につながり、学生と教職員双方にとっての教育環境の改善につながっていくことが望ましい。FDは、教員の領域（狭義のFD）、カリキュラムの領域（ID：Instructional Development）、大学全体の研究教育環境や教育制度の領域（OD：Organizational Development）の3つからなると考えられ、学生の能力や修学意欲の程度に応じて、効果のあるFD方策を展開していく必要がある。

■フレッシュマン・ゼミナールの成果

政経学部では、平成20年より初年次教育として30人編成のゼミナールを専任教員全員が担当するようになり、その状況を定期的に教授会後に話し合ってきた。ここで、学生が中学・高校生の意識から抜け出せないこと、卒業後の進路を描けないこと、自主的な学習意欲が低いことなどが、共通項となっていることが分かった。このような世代課題は、教員個人だけでは解決できず、学部及び大学全体で対応しなければならないという意識が共有された。

FDには、研究教育環境や教育制度を整備するODやカリキュラム開発といった外形的なFDと、学生の「やる気」や「生きる気力」を高める内実的なFDがあり、両者をうまく接合させていくことが重要だと気づかされたことも大きな成果である。



学生の参加意欲喚起が重要

■教材開発型FDと修学指導型FD

学部のFD方策には、科目開発型、教材開発型、個別課題対応型、新任教員、キャリア指導型、修学指導型などのFDがあり、それぞれ具体的な活動を展開してきているが、ここでは教材開発型FDと修学指導型FDについて紹介したい。

教材開発型FDは、フレッシュマン・ゼミナールの副読本を教員自らが執筆して作成している。今年は3年目に当たるので、学生の反応を見て、チームごとに改訂作業を進め、チームによってはテーマの変更もしている。また、2年次の基礎ゼミナール向けに政治学科では副読本の作成に着手している。

今までは自主的な学生が、普通の学生の姿であったが、ゆとり世代が入学するようになり、修学指導の必要性が高くなってきている。そのため、政経学部では、学年担任が成績・出席不良者や留年者に対して、きめ細かな修学指導をするようにしている。また、その指導法や状況を担任会で議論し、修学指導のシステム化と対応策を検討している。この修学指導型FDにより、手間をかければ一定の成果が出ることが分かってきた。

■本質的な課題へ挑戦

政経学部のFD活動で分かってきたことは、学生自身のやる気や参加意欲を喚起しない限り、FDは功を奏しないということである。中学・高校とあまり勉強したことがない層が大学に入学する時代になり、学生にどうやって自信を持たせることができるか、社会の役に立たせることができるかを、教育法や仕組みとして開発しなければならない段階に来ている。早く第3段階の実効期へ進んでいきたいが、FDはすればするほど亀の歩みであり、実践と評価をくり返していく必要がある。

今後、体験型学習の導入やキャリア指導型FDなどを複合的に導入し、自分に自信を持って社会に貢献していく学生を輩出していきたいと考えている。

（政経学部教授）

退職者コメント

政経学部教授　奥深山親司

昭和36年、政経学部が設置され1期生として入学し、爾後、国士舘生活が約半世紀です。昭和45年に専任講師に採用され、在職40年間、ひとえに恩師や創立者の御恩と学生、教職員のご厚誼の賜物と感謝しています。この間、国士舘の節目に近代化委員会・学内諸問題対策委員会などの委員を拝命し、学園改革の一端に当たりました。政経学部二部の学部長などを歴任し、聊かでも教学部門の進展に貢献できたと思っております。評議員として学園経営の末席も体験させて戴きました。

この間、多くのゼミ生や課外クラブ（硬式野球部・政治学研究会）の学生と、思い出多い学園生活を過ごしました。これからも国士舘教育の面倒見良い少人数教育を維持し、受験生に選ばれる大学づくりを念願しています。

政経学部准教授　永橋　弘价

昭和45年に奉職して3年目に創立者柴田德次郎先生が逝去されました。その後、国士舘の民主化運動が発生。同運動は社会問題となり、学園封鎖を持って民主化が認められました。組織の民主化と財政健全化のためにこの運動に参加した事が強く印象に残っています。

外交史の講義では、客観的な事実の把握と批判的精神の涵養に努め、学生主任の時は質実剛健と礼節の尊重を指導方針としました。また、スポーツ振興会の設立に参加、今年野球部の一部昇格と同時に同副部長を卒業。国士舘大学で過ごした日々は、実質的には私の人生の全てだと思います。

40年間にわたり学生の指導教育と研究に従事する職を与えてくださった柴田德次郎先生をはじめ、先人の諸先生および教職員の皆様に深く感謝します。

体育学部教授　二ツ森　修

昭和34年、国士舘大学に入学、この年にラグビー部が創部。以来、今日まで50年、建学の精神である「誠意・勤労・見識・気魄」を教育方針としてグラウンドに立ち続けた。在学中は東京オリンピックが目前で国中に活気があった。その影響か、国士舘の将来にも胸を膨らませていた。

昭和38年4月、助手として大学に残り今日に至る。ラグビー部は創部7年目の昭和40年に全国大学大会の関東予選で優勝、翌年1月の本大会に出場し、悲願の初優勝を遂げた。その後も同53年に関東大学リーグ1部優勝など、数々の優秀な成績を収め、日本代表や代表候補、日本学生代表、各プロック代表などを多数輩出した。卒業生の多くは現在も全国の教育機関や企業で活躍している。今後も本学のさらなる発展を祈念する。

体育学部教授　堀江　健二

昭和41年、体育学部を卒業と同時に助手として奉職させていただいてから44年、体育学科主任・体操競技部部長を最後の任務として退職いたします。勤続44年。当初はまだ給料遅配もあって、大学は苦難の時代でしたが、それでも教職員が皆、一人前の大学を目指す意気込みが強く協力的でした。

多くの紆余曲折がありましたが、これらを乗り越えて現在の総合大学としての国士舘があることは確かです。44年間、病気等で欠勤することもなく、縁の下の力持ちとして勤めることが出来ましたことは大変幸運でした。

長い間ご配慮をいただきました国士舘大学関係の皆々様に深く感謝申し上げますとともに、これからも特色を持った堅実な大学としての発展を祈念いたします。

理工学部教授　山根隆一郎

機械工学科で10年間流体力学を担当させて頂きました。前任校では主に大学院生が中心でしたので学部生を相手にするのは非常に新鮮でした。大学院生、特に博士課程の学生はその分野では専門家であるため手応えがあり、真剣勝負のような気持ちでした。

学部生は何を言っても申し訳ないほど素直に信じてくれるため、返って教える内容や方法に工夫のし甲斐がありました。

この度の退職にあたり、現2、3年次の学生が自分たちの卒業研究のために特別に残ってくれないかと言ってくれたことは最高の名誉と嬉しく思っています。四十余年の大学生活の最後の期間をこのように楽しく過ごさせて頂いたことを大変幸せに感じ、深く感謝しております。

「老の将に至らんとするを知らず」とは、孔子の学問に対する情熱・意気込みを述べた言葉である。本学に文学部が新設された昭和41年のころは、学問のため、修養のため、そして学生のため、大学の充実発展のためにと、ご自分が年を忘れて学統の正しいご年配の教授の方が多くいらっしゃった。

小生など文学部の新設と共に任用されながら、徒に教職員の皆さんにご迷惑をおかけするばかりで、何の役にも立たないまま老い込んで定年退職の時を迎えてしまった。忸怩（じくじ）たるものがある。

幸い国士舘大学には、優れた教員組織と実務能力豊かな職員組織が機能している。将来にわたり生き残れる大学であると確信している。

文学部教授　廣野　行甫

昭和37年、国士舘大学体育学部体育学科に入学。卒業後、教員として本学に奉職し、44年間を過ごしました。この間、体育学部で助手、講師、専任教員を勤め、昭和48年より文学部で教育学科初等教育専攻の小学校体育指導を担当しました。

当初は創立者・柴田德次郎先生の舘宅地にあった官舎に入居し「誠意・勤労・見識・気魄」を学びました。その当時は早朝の大太鼓で一日の活動が始まりました。学生は大太鼓の音を合図に起床・清掃し、食事を摂りました。皆黙って麦飯・納豆・牛乳を食べていましたが、今ではその時代を懐かしく思います。朝礼で柴田先生が馬に乗って入場したことも印象的でした。

学校を去ることは残念ですが、国士舘のさらなる発展を心より祈念致します。国士舘バンザイ！

文学部教授　渡辺　源樹

国士舘大学在職32年、教養部改廃に伴い、続いて文学部でお世話になりました。月日に関守なし。さしたる思い出はありませんが、あえて言えば教養部時代、本学の学生と他大学の学生とが合同で実施した夏の山中湖での研究合宿です。

合宿後も我が家を解放し、夜を徹して調査研究をやり遂げました。これは科研費の対象研究として実施されたものですが、そこでは彼らと裸の交流ができ、今でも忘れがたいものになりました。学生諸君、ありがとう。

この十年来、他大学同様、国士舘大学も改革のもとで大きく変わりました。大学全入時代、私学苦境の時ですが、裏を返せばチャンスでもあります。先人の偉功である大学の理念のもとで、魅力ある大学づくりに期待し、大学の更なる躍進を祈念いたします。

文学部教授　橋本　太朗

昭和62年から非常勤講師として14年間、その後専任教授として9年間勤めさせていただきました。その間、文学部の教育学専攻主任、教職課程委員会委員長、そして全学教職課程委員会委員長等を経験いたしました。教育学専攻の会議は、年々議論が多く交わされるようになり明るくなりました。

教職関係では、理想的な教職課程運営委員会を創りたいと努めましたが、残念ながらそれは実現しませんでした。国士舘大学は、いまだ改革の余地の多い、発展する可能性の高い大学です。改革を推進し成功させるためには、どうしても、理事と評議員の選挙制の導入が必須となります。

これによって大学のさらなる発展が確実のものとなるでしょう。それを心より祈念いたします。お世話になりました。

ＦＤ推進室　草彅　勝興

「オイ草彅、卒業したらどうするんだ！」。林勇学生監のこの一言で今日の私が決まった。

以来四十有余年、日なたも日陰も歩いた気がするが、いずれも楽しい思い出である。その間に書いた「始末書・進退伺」が2枚、何とか無事今日に至った。

政経学部学生監助手を皮切りに時間割編成、定員増・学部・学科設置申請庶務そして短期大学と体育学部の事務室勤務が私の43年の概略だが、2年半、自動車学校で指導員のまねごとをし、草刈りをしたことは私の経歴のなかでは特筆すべきことである。また、通常の異動日ではない辞令が何枚あることも私の勲章でもある。国士舘の門をくぐって53年、これからは卒業生として、また事務職員のOBの一人として母校の発展を見守りたい。

政経学部事務室　和田　任功

昭和42年本学体育学部を卒業以来、42年間職員として勤めさせていただきました。その間工学部、体育学部、総務課印刷室、政経学部二部、自動車学校、鶴川事務課、就職課、大学院、学生課、政経学部を渡り歩き、多くの学生たちの本音に接してきたと自負しております。

日本経済においても成長期、バブル期、崩壊期、就職氷河期、そして現在のより厳しい時代へと変化するにつれ、学生たちの思いも生活形態も変化を遂げ、良くも悪くも古き国士舘精神を持ち続ける私のような者は、周囲の方にご迷惑をおかけしたことも多々あったと思います。しかし学生たちを思う心に揺らぎはなかったと感じております。これからの日本を担う学生たちにエールを送るとともに国士舘大学の益々の発展をお祈りしております。

監査室　鈴木　優

昭和53年4月に29歳で国士舘へ奉職してから32年。経理畑一筋に経理課長、財務部長を歴任し、国士舘の財政面を担い、最終年は監査室勤務となりました。特に心に残る思い出は、現地のブラジル人弁護士と国際電話などで1年間やりとりしたブラジル支部の閉鎖や、資金繰りをやり遂げ、無事落成した梅ヶ丘新校舎の建設などです。また、私立大学協会の経理財務研究委員会の委員と日本高等教育評価機構の評価員を務めたことも、大変良い人生経験をしたと感謝しています。

最後の一年は家庭の事情と持病のため、ご迷惑を掛けてしまいました。満定年まで勤め上げたかったのですが、残念ながら早期の退職となってしまいました。今後の国士舘のさらなる発展を祈念します。お世話になりました。

●第479号・2面「感謝状」贈呈者で、中学・高校「刈谷進一＝刈谷崇治」とあるのは、「苅谷進一＝苅谷崇治」の誤りでした。訂正してお詫びします。